

[キリ×ユウの日常]誕生日sp [ユウキ家を買う]

迷劉/めいりゅー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

キリト、ユウキは付き合つてません。
2人とも高校生。

キリト→ユウキの片想いです。

目次

「キリ×ユウの日常」誕生日sp 「ユウ

キ家を買う

1

「キリ×ユウの日常」誕生日 s p 「ユウキ家を買う」

5月20日

ALO内のとあるエリア

ここは周囲一体からモンスターがリスボーンする、高難度な狩り場として、隠れたスポットである。そしてここに今、2人のプレイヤーが次から次に出現するモンスターに、縦横無尽に斬りかかっていた。

うち一人は少年。黒を基調とした黒の黒^{シルバーブラック}とまでは行かないものの、影妖精族^{スプレリガン}という種族からして、黒のイメージを持つている。そんな彼の名は「キリト」。かつて、SAOというゲームにおいて、最高の反射神経を持つプレイヤーに与えられる、「二刀流」のユニクスギルを受けられたプレイヤーだ。その反射神経は今も尚健在であり、トップ層を走る一人だ。

そして、もう一人は少女。こちらは紫を基調とした、闇妖精族^{イジンゴブ}のプレイヤー。ちよんつと伸びたアホ毛や、額に巻いたヘアバンド、などの特徴を持つ少女。可愛らしい見た目とは裏腹に、ここALOでは「絶剣」という二つ名を持っている。由来として、絶対無敵の剣、空前絶後の剣、というやはり強者として付けられた二つ名である。

かれこれ小一時間、2人は狩りに狩つて、ようやく引き上げを決めて、安全圏内へと向かっていた。

キリト 「……なあ、ユウキ。」

ユウキ 「せりやあつ！……どうしたの、キリト？」

この間ほぼ無言で戦闘に勤しんでいたため、久しぶりとなる会話をキリトは切り出した。ユウキは飛びかかってきたモンスターを、切り伏せキリトの話に返答をする。

キリト 「この後暇かな…良ければ俺と――」

ユウキ 「キリト、そつちにモンスターが…」

キリト 「――お昼ご飯にでもぐはっ！」

まだ残つていたモンスターが居たらしく、ユウキにご飯の誘いを申し込もうとしていたキリトに、不意打ちの突進を御見舞する。無論、ユウキに目を向け、意識を向けていたキリトは、ノーガードの脇腹にその突進を受け入れた。呻き声と共に、ノックバックで吹き飛び、どさつとユウキの足元に着地した。

ユウキ 「…だ、大丈夫？ 結構飛んでたけど。」

警戒するように周りを見渡しながら、キリトに一言気遣いの言葉をかける。そのモンスターは草むらに隠れたらしく、ユウキには視認出来なかつた。

しかし、未だタゲはキリトへと向いている。つまりはそのモンスターは再びキリトに

襲撃するチャンスを伺っているのだ。

キリト 「あ、ああ…油断してたぜ…。それでこの後お昼ご飯に——」

あまり強くないモンスターだつたらしく、そこまでのダメージは負つていなかつた。ユウキの心配は不要だつたようだ。

キリトはふらりと立ち上がり、諦めもせずにユウキへと誘いの言葉をかける。

ユウキ 「キリト！」

またもやナイスなタイミングで、モンスターがキリトの後ろから突進を仕掛けてきていた。それに気づいたユウキは、迎撃しようと剣を抜こうと柄に手をかけた。

キリト 「——でもいくあ！…ないか!?」

ユウキ 「お見事！流石はキリトだね。」

2度目はない、とキリトは誘いを無理やり続けながらも、襲撃してきたモンスターをぶつた斬つた。残念ながらユウキには誘いの言葉は聞き取られず、キリトの見事な動きに見惚れていた。

キリト 「そ、そうか？ユウキに言われると嬉しいな。」

ユウキ 「えへへ♪ そうかな♪。」

キリト 「…つてそうじやない！いや、ユウキのことについての、そうじやない訳じやないんだ。話が逸れたことについてのそうじやない訳で…！」

ユウキ 「あはは、分かつてると。さあキリト、お話を続きをどうぞ。」

ユウキはキリトの焦りように、少し笑いをこぼしてから、キリトの方を向き直った。

キリト 「あ、ありがとう。でき、良ければなんだが、この後お昼ご飯でも食べに行かないか?」

ようやく誘いの言葉を、ハツキリと落ち着いて言えたよう。因みにキリトの「ユウキを飯に誘う」の戦歴は2勝0敗35分けである。引き分けの要因として、アスナの妨害を受けてしまうのだ。ユウキと2人で行動出来るのが少ないにも関わらず、ご飯の時になると、どこからとも無くアスナが現れ、結局3人以上の食事となる。

今日は珍しくアスナもログインしておらず、誘うには絶好のチャンスだ、とキリトは考えていたのだ。

ユウキ 「うーん、ごはんか…でも遠慮しどうかな。実はね、今度ボクもマイホームを買いたくてさ。そのために今は節約してるんだよね。」

キリト 「へえ…どこを予定しているんだ?」

申し訳ない、とユウキは手を合わせる。

しかしキリトは、ユウキがホームを持つということに興味が向き、先のご飯の件より重大と判断された。よつて、断られたことについてショックを受けるより先に、そちらの質問がなされたのだ。

ユウキ 「んーとね、多分キリトのホームの直ぐ近く、かな。あそこら辺に良い物件があつてね。即決したかつたんだけど、あまりお金に余裕がなくて、今はとりあえず貯金中。」

キリト 「そつかそつか。俺のホームの近くかあ。」

キリトがホームを構えているのは、自然豊かでモンスターのポップがない、という事が利点である、新生アインクラッドの22層だ。キリトもそこの自然溢れ、開放された土地を、心底気に入っている。

キリトは、ユウキもその土地を気に入ってくれたこと、と言うよりはむしろ、ユウキが近くに住み移るという事に喜び、思わず口元が緩んでしまう。

ユウキ 「うん。でもね、何故かアスナには反対されちゃつたんだ…。何でもその附近には恐ろしいモンスターが居るんだとか。それで、ボクも悩んじゃつてさ…。キリトはどう思う?」

キリト （そのモンスターって、絶対俺のことを指してゐるだろ!?!ことごとく邪魔してくれるな…!）

アスナの事だ。そういうデマ：ある意味事実なのだが…を流し、ユウキをそこに住まわせないと図つたのだろう。なぜならそこに住むキリトは、そんなモンスターに一度も出くわしてないからだ。

キリト 「俺は大賛成だし大歓迎だ。それに俺はそんなモンスター見たことないぞ。
住んでいる俺が言うのだから、間違いない。」

ユウキ 「そつか：確かにキリトがいないと言うのなら、いないのは間違いないよね
！うんありがとう、キリト！ボク購入することを決意したよ！」

キリトの話を聞いたことで、すっかりと迷いが失せ、ユウキは
キリト 「それは良かった。ご近所としても色々手伝うから、何かあつたら話してくれよ。」

ユウキ 「わあ、ありがとう！キリトは頼りになるな♪♪」

上機嫌に軽い足取りで歩を進めるユウキ。それを後ろからキリトは微笑ましく眺めていた。

何かある事を忘れてないか…と、ようやく事の本題へと思考が戻る。

キリト 「よし、そういう事なら昼飯は俺が奢るよ。」

ユウキ 「え、いいの？」

まるで今決めたかのように、キリトはそれを口にする。が、当然の事ながら、元よりキリトは奢ろうとしていたのだ。最近は買うものも少なくてしまい、使い道と言つたら食事しかなくなってきた、というのも理由の内の一つである。

キリト 「全然大丈夫だ。ご飯の一回や二回くらい、どうつてことないよ。強いて言

うなら、ユウキに奢ってくれと言われば何度でも。」

キリトはさも当然のように、キツパリとそう言い切った。

ユウキ 「流石にそこまではお世話になれないけど、本当にありがとね。じゃあ今日は奢つても一らおつと。」

キリト 「よしつ！どこに行くか？何ならすぐ高い所でもいいぞ。」

ユウキ 「いやあ…ボクもそれは気が引けちゃうよ。喫茶店っぽいところにしない？そこならお手軽だと思うな。」

キリト 「おう。ユウキがそれでいいなら、そこにしようか。」

昼食を取る店が決定し、2人はその店がある街へと飛んで行つた。と、言つてもそこまであまり距離もなく、数分の飛行を楽しんだ後、お店へと着いた。

2人とも適當なメニューを注文し、それを食している最中。

キリト 「そう言えば、ホームを買うのに足りないユルドつて…いくらなんだ？」

ユウキ 「もぐもぐ…ん。えっとね、正確に言うとホームと家具を買う分なんだ。」

そして、めでたくホーム分は今日の集まつたよう。」

サンドイッチとポテトフライを注文したユウキは、頬張つていたサンドイッチを飲み込み、キリトの質問に返答する。無論、今日の、というのは先程までの討伐分である。キリト 「ふむふむ…確かにすつからかんの家は嫌だよな。俺は何も考えずに、後か

らちよこちよこと買つてつたなあ。」

キリトもユウキと同じメニューを取りながら、ユウキのホームについて考えていた。

ユウキ 「ボクはね、最低でも机と椅子は欲しいんだ。そうすれば辛うじて皆呼べるでしょ？ 頑張つて明明後日のボクの誕生日までに間に合わせたいんだ！」

どうやらユウキは誕生日会を、新ホームで執り行いたいらしいのだ。そして、誕生日を祝つてもらうのに、開いてもらうのではなく、自分で開いて呼びたい、とそういう事のようだ。

キリト 「確かに、それまでに間に合わせたいな。」

ユウキ 「うんうん。：で、さ。お願ひなんだけど、明日もユルド稼ぎを手伝つてもらえないかな？ 今日はキリトにお世話になりまくつてるけど：。」

こうしてキリトにお願いしているのは、アスナ達に頼れないからだろう。ユウキは知る由もない理由（キリト）のせいで、アスナはホームを反対している。とは言つても、ユウキが買うと決めればそれ以上に否定はしないだろう。ただ、やはり肯定してくれるキリトに、頼りやすかつたのだ。

キリト 「俺から直接ユルドを出す事は出来ない：と言ふかユウキが嫌だらうけど、そういう事なら何なりと。いくらでも付き合うよ。」

無論、キリトは何の迷いもなく承諾をする。頼られていること、2人の時間を過ごせ

ること、その二つの喜びを噛み締めながら。

ユウキ 「ほんと!? やつたあゝ♪キリトが一緒なら百人力だね！」

キリト 「出来る限りを尽くさせてもらうぜ。」

ユウキ 「よーし、明日の午後7時にここで集合つてことで、よろしくね！」

キリト 「ああ、分かった。」

こうして翌日もキリトのボーナスデイとなる事が決まり、心の中でガツツ。ポーズを連発する。あくまで冷静な表情を保ちながらも、その裡にはニヤケ笑いが溢れ出ていた。その後暫く話し合いをしてから、丁度いい時間となる。

ユウキ 「明日も頑張ろー！」

キリト 「おう。それじゃまた明日。」

ユウキ 「うん、じゃあねー！」

2人は別れ、各自ログアウトをして、この日を終えた。

5月21日

PM 7:00

ユウキ 「こんにちはーキリト！ 待たせちゃったかな？」

キリト 「いいや、全然。課題も終わらせたし、特にすることもなかつたしで、少し早く来ただけさ。」

ユウキ 「ボクも終わらしてきたよ。だから今日は、ノルマまで飛ばしてこーっ！」
キリトもユウキも学生の身。それなりの勉強と課題は2人とも背負っている。今日はそれらを片付け、夕食を摂った後に集合と決めていたのだ。

ユウキ 「むむむ…やっぱりこのクエストが一番効率いいよね？」

キリト 「確かにそれは効率が良いけど、素材を全て売ることを前提とするなら、こっちの方が稼げるんじゃないかな。」

ユウキ 「なるほど！ 流石キリト、頼りになるよ♪」

結局2人が選んだのは、指定モンスター郡の討伐であつた。それは他に重複しているクエストがあるため、一気にまとめて行えるのだ。一番効率の良い稼ぎ方を、昨晩キリトは調べ上げたことは、ユウキには内緒である。

—2時間後—

ユウキ 「いやあ…疲れた…。」

同じ喫茶店に戻ってきたユウキは、ボロボロに疲れ果てており、机に突っ伏したらそのまま寝てしまう勢いである。流石のユウキでも2人だけで、モンスター討伐を2時間続けるのはキツかつたようだ。

キリト 「お疲れ様。ほら、冷たいジュースでも飲むか？」

ユウキ 「ひやあ、冷たいつ、気持ちいいつ。」

ユウキに比べて元気そうなキリトが、ぼーっとしているユウキのおでこに、ジュースの入ったガラスを当てる。ふわふわと飛んでいたユウキの意識が、その刺激により一緒に舞い戻った。

ユウキ 「ちゅー…美味しい…癒されるなあ…」

キリト 「途中、ポーションが美味しい、って言い始めた時は、少し危ないとthoughtたよ。体調とか悪いとこないか?」

ユウキ 「あはは…もう平気だよ。心配かけてごめんね。」

大丈夫、とアピールをするユウキだが、疲れが明らかに見て取れる。

キリト 「…そうか。ま、何はともあれノルマは達成したんだろう?」

ユウキ 「うん、キリトのおかげでノルマ以上にまで貯まつたよ。」

後半から金額の事を頭に置かず、無我夢中で戦闘をしていたため、かなり余分に貯めてしまつたのだ。あつて困るわけではないが、疲れを伴つてているのだから、多少の後悔をしている。

ユウキ 「そうだなあ…家具含めて、色々買うのは明日にしようかな。…明日もお願
いしてもいい?」

キリト 「うーん…明日の午後から予定が入っているから、それまでだつたら大丈夫
だ。」

ユウキ 「そつか…実は明日の午前は、ボクの方に予定があるんだよね。頼みづらいけど、アスナに頼もうかな。」

ユウキのホーム購入計画が、ここまで辿り着いたのは、キリトのおかげもある。だからこそ、ラストである買い物は、是非ともキリトにも付き合つて欲しかったのだ。そのため、キリトに用事があつて同行出来ないのは、ユウキとしては残念な事であった。

キリト 「本当に申し訳ない…。」

ユウキ 「キリトが謝ることじやないって！ 2日も付き合つてくれたことに感謝だよ

！」

キリトが頭を下げてまで謝ろうとするので、ユウキは慌ててキリトに本意として伝え
る。

ユウキ 「…あ！ 忘れてた…アスナ達に用があるんだつた！…ねえキリト、ボクの今
の顔つてどう？」

キリト 「いつも通り整つていて可愛い顔だぞ。」

ユウキの顔を確認してから、さらりと答える。キリトには珍しい実の本音である。か
なり長い間、ユウキとの時間を過ごしていたため、段々と大胆になつてきているのかも
しない。

ユウキ 「う、嬉しいけど、そうじやなくて…疲れてるよう見えないよね？」

キリトから初めて聞いた、「可愛い」という言葉に少し照れながら、聞きたい本質的な質問に変えた。

キリト 「…残念ながら、いつもより疲れてるよう見えるな。」

ユウキ 「そつか：でもアスナには明日の事を言うわけだし、仕方ないか。」

恐らく疲労感を見せれば、アスナに余計な心配をかける、そう思つたからだろう。しかし、今から明るく振る舞うのに使えるエネルギーも無く、致し方ないと諦めをつける。ユウキ 「今日は本当にありがとね！ 明後日はボクのホームに招待するから、絶対に来てよね！」

キリト 「ああ、また明後日。」

そう言つてからユウキは夜の空を飛んでいった。ユウキを見送ったあと、キリトは身体を脱力させ、机に突つ伏した。

キリト 「あー俺の心の支えが抜けた感じが…。」

キリトがユウキより疲れてなく、余裕があるように見えたのは、常にユウキというポーション並の回復があつたからなのだ。それが離れてしまい、キリトは本来の状態へと戻つたという事だ。

キリト 「くっそお、俺のバカ野郎…！ ユウキへのプレゼントを、もつと事前に準備しておきや良かった…！ 聞くのに時間かかったとかあるけど、明日じゃなくてだなあ：」

!

と、大切なユウキとの時間を蔑ろにし、その機会をアスナに譲るという、己の過ちを悔やむ。そして机に頭突きをしては、ため息をこぼしてまた頭突き。これを繰り返すことを数分、遂にキリトは明日の事を諦め、大人しくログアウトをして、明日に備えることにした。

5月22日

PM 4:00

ユウキ 「結構迷いに迷つたけど、これにて終了ー！」

アスナ 「大分良いのが手に入つたよね。値段相応つてやつ。」

ユウキ 「うん。ギリギリだけど間に合つて良かつた。これも全てキリトのおかげだね！」

アスナ 「…あれ？ 今そのキリト君が走つてない？」

ユウキ 「ほんとだ：確かキリトは用事があるって、言つてたけど。ALOの中でのだつたのかな？」

アスナ 「まあ、こつちに気づいてなかつたし、それほど大変な事なら邪魔しない方がいいよね。」

ユウキ 「そうだね。じゃ、本命の方に行こう！」

そして、無事にユウキはマイホームを買うことが出来、アスナと2人で、買い揃えた家具などを設置し、更には明日の準備まで整えた。

一方キリトはとある目的の物を得るために、フィールドや街を縦横無尽に走り回つていた。 キリトがクエストを始めたのが午後1時。既に3時間に渡る対峙を続けていた。

こうして、各々が準備を重ね、ユウキの誕生日の前日であるこの日が終わつた。

5月23日ユウキの誕生日当日

会の始まりは午後の7時からと決めていたので、それまでにユウキはキリトに再度お礼を言おうとしていた。しかし、午前中はログインせず、連絡をしてみると、キリトの代わりに妹であるリーファが現れた。

リーファ 「本当に申し訳ございません！お兄ちゃん：今朝から体調を崩してしまつてまして…。それでもログインしようとするもので、今は無理やり寝させました。会が始まるまでに治す、と言つてたから、多分大丈夫だと思うよ。」

ユウキ 「そつか…お大事について言つといて。あと、無理には来なくても良いから、体を大切にしてねつて。」

リーファ 「はい。なんか昨日も長い時間やつてたらしく、その疲労が祟つたんだと思ふから、ユウキはそんなに気にしなくて大丈夫だよ。じゃ、私はこれで。」

そう言い残してリーファはログアウトをした。

ユウキ 「でも、やっぱりボクが付き合わせたからかな…。」

アスナ 「ううん、違うよ。キリト君はユウキのためにとやつてたんだから、それくらいではヘタれないわよ。とにかく復活することを願つて、私たちは料理準備を済ませちゃお?」

ユウキ 「うん。…よーし、美味しい料理を作ろー!」

自分のせいかも、という不安を心に仕舞いこみ、ユウキはアスナの指示の元、手作り料理に取り掛かつた。

PM 7:00

遂にユウキの誕生日会が始まった。集まつたのはスリーピングナイツのメンバーを始め、シノンやシリカ達であつた。しかし、キリトは出席しなかつた。

リーファ 「えー、伝言を頂いてます。「参加出来ない事がとても悔しいが、俺のことは気にせずどうか楽しんでくれ。あとユウキへ、お誕生日おめでとう。体調管理が悪くて本当に申し訳ない。」だ、そうです。熱が下がつたらログインしてくるそうですが、多分可能性は低いです。」

と、キリトの欠席をリーファは伝える。変に悪化したらしく、1日だけでは身体が治らなかつたのだ。

ユウキ 「そつか…あとでキリトにはちゃんとお礼をするよ。つてことで、キリトに

は申し訳ないけど、始めよつか！」

アスナ 「そうだね。キリト君の分まで、楽しまないとね。それじゃ——」

「誕生日おめでとう、ユウキ!!」

皆の揃った祝福の声で、ユウキの誕生日会は始まつた。ユウキとアスナの精一杯を込めて作つた、かなり贅沢な料理。更には、シノン達が持参したドリンクで、会は大いに盛り上がつた。

ユウキ （そうだ。一応キリトにメツセージを送つとこう…。）

和人の部屋

和人 「けほつけほつ…ユウキのご飯食べたかつた…。」

かなり寝たせいで寝付きが悪くなつてきており、じわじわと後悔の念が浮かんできている。その現れとして、ぼそぼそと独り言を呟いていた。

ピロリン

その時、スマホのメッセージ着信音が鳴る。一人静かな空間であつたため、和人は躊躇いなくそれに手を伸ばした。

和人 「ユウキ…えーと、なになに…」

『具合はどう？ボクのために長い時間無理させてごめんね。もし体調が良くなつて、口グインできるようになつたら、今日の何時でも連絡して。ちゃんとお礼と謝罪をしたい

から。』

和人 「…治そ…12時までにならセーフだよな!?」

と、速攻で簡単な返信をしたあと、直ぐに寝についた。あと4時間半以内に体の中の菌を撲滅するために。

PM 9:00

2時間の楽しい会はあつという間に終わり、ここでお開きとなつた。残つたのはアスナとユウキで、2人で後片付けをしていた。

ユウキ 「今日はありがとね! 最高の誕生日だったよ!」

アスナ 「うん。キリト君のために料理も残しておいたんだつけ? ユウキは優しいね。」

ユウキ 「えへへ、ボクらの自信作だもん。キリトにも食べてほしいもんね!」

粗方の片付けが終わり、アスナも帰つてログアウトした。1人残つたユウキは庭に出て、ぼーっと美しい夜の星空を眺めていた。

PM 11:30

ユウキ 「あ…キリト!」

キリト 「ハアハア…本当に申し訳ない!」

まだ体調が少し悪いらしく、息を荒くしながらユウキの側に寄つた。

ユウキ 「いやいや、こちらこそだよ。今日は楽しかった…全部キリトのおかげだよ。本当にありがとね。」

キリト 「何してたんだ? もしかしてずっとここに?」

ユウキ 「いいや、さつきからだけだよ。ちょっと綺麗な星空をね。ボクさ…この星空が好きで、ここにホームが欲しかったんだよね。」

キリト 「俺も好きだな。本当にここからの星空は綺麗だからな。」

と、暫く2人で星空を眺めていた。まるで2人で時間を共有するかのように、この時間を使い込んだ。

キリト 「あ、そうだ…遅くなつたけど、誕生日おめでとうな。…はい、これは俺からのプレゼント。」

割と大きめなプレゼントボックスを、キリトはストレージから取り出すと、ユウキに差し出した。

ユウキ 「ありがと…って、これ…!」

それは紫色のテディベアだつた。抱き心地が凄く気持ちいい、と説明があり、ユウキはそれに一目惚れしていたのだ。

キリト 「ああ、ユウキが欲しいって言つてた、限定のぬいぐるみ。気に入つてくれたか?」

ユウキ 「うん！すつごく嬉しいよ……も、もしかして……昨日？」

ユウキは昨日、キリトが用事として、ALOで走つてたのを見たため、それを予感したのだ。体調不良の原因は昨日の用事だと聞いていたため、それを危惧したのだ。

キリト 「ち、チガウヨ……」

明らかなどぼけで、ユウキを誤魔化そうとする。しかし、当然ユウキは騙されることもなく、申し訳なさそうに俯いた。

ユウキ 「やつぱりボクのせいじやん…ごめんね、こんな言葉じや足りないけど。」

キリト 「こ、これは…俺がユウキの喜ぶ顔が見たかったからだ。俺のためでもあるから、ユウキのせいじやないんだぞ！」

ユウキ 「ありがとね。これ大事にするからね！」

キリトからのプレゼントであるテディベアを大事に抱えた。

キリト 「ユウキが喜んでくれて本当に良かつた。今年は俺がラストだつたけど、来年は俺が一番におめでとうと言うからな。」

ユウキ 「えへへ、キリトの時もボクが最初に言うからね！」

こうして2人で5月23日を終えたのだつた。